
転生日記

撲殺天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生日記

【Nコード】

N4021P

【作者名】

撲殺天使

【あらすじ】

心は女子高生。体は男。頭脳は平均。

砂隠れの里に産まれた不幸な少女……訂正、少年。彼の友情とかシリ阿斯とかバトルとかその他諸々のNARUTOなお話。

第一訓（前書き）

突発ネ夕。

我愛羅転生もの。

第一訓

某月某日（晴）

正真正銘の現役女子高生、伊藤椿18歳。容姿、中の中。自慢出来る事があるとしたら、黒髪の美しさくらいのもの。最近なんか就職先が決まって、卒業を間近に控えた平凡な少女だった。……だったのだ。過去形なのだけれど。

そして、今現在の自分の状態、状況を振り返って、何回確認しようと夢が覚める兆しはない。そう、永遠に覚めない夢。

私の脳が今の状況を理解する以前に、拒否反応を示すのだ。到底、この現実を受け入れられないと……。

産まれて6年、今では立派に引き籠もりの仲間入りだ。つまり、現実逃避者だった。

「ああ」

涙が出る。

ありえないありえないと言い続けて6年の月日。

前世、交通事故に遭うあの日まで、…まさか部屋の片隅で膝を抱え、泣く日が来ようとは思わなかった。

けれどそれくらい、現代っ子の私には、過酷な現実だった。最近でこそ減ったが、忍としての教育は困難を極めた。

確かに、私はオタクと呼ばれる人種だったが、漫画の世界に転生したいなど、願った事もない。まして、死亡率高いNARUTOの世界に生まれ変わりたいなどと思う訳がない。

「『小僧オ、ウルセエンダヨオ！ソナニ泣ククレエナラオレヲココカラダシヤガレエ！存分ニ暴レテスツキリサセテヤルゼエ！？』」

おまけに、守鶴が煩くて碌に眠れやしない。そのお陰で原作同様の事態、不眠症に陥った。この間など鏡を見たら、目の回りの隈が凄い大惨事になっていた。まんま”我愛羅”だったが、可愛くなかった。女の子じゃあるまいし、当然かもしれない。可愛いくない、寧ろ目つきが凶悪な男の子だった。あまりに荒んだ目の自分に愕然とした。

「あんたの方がうつさいっての！」

何度か外に出た事があるのだが、石投げられるわ、守鶴が暴走するわ、殺されそうになるわ、散々な目にあった。

以来、外出をなるべく控えるようになった。変わった事と言えば、父様が刺客を送って来るようになった程度。ついこの前までは、大切に、慎重に育てられていたのが嘘のようだ。今更だが、自動防御の砂が無ければ今頃野垂れ死んでいた。

あの親父、頭がおかしいと思う。私利私欲の為に息子に化け物を封印し、手に負えなくなると用なし扱いだ。…勘弁してほしい。あんなのが風影っただけで、気が滅いる。事前に解っていた事だけど、精神的に不安定なのは原作我愛羅と変わらないのだ。

「ちくしょう…、胸糞悪いぜ…」

こんな里に愛着など持てる筈がない。それに、この世界、危険でいっぱいだ。日々生き残るだけで大変なのに、果ては人柱力にされる始末。狙われるだろうし、平凡ではいられまい。

何より、我愛羅と言えど、死亡キャラだった筈。原作では見事生き返った見せたが、この私が助かる保証がない。

逃げようかな、と、愚かな考えが脳裏を掠めた。多分、無意味だ。人柱力が狙われるのに変わりない。今の私の力では、確実に殺され

る。結局どこに居ようとおなじことなのだ。

「『……………女々しいシイ奴ダナア』」

「悪いか。心はホントに女だよ。分かんない？ああ、いいんだ。解る訳ねえよな」

疲れた。億劫だ。6才児にして疲れ果てた。

守鶴とは、マトモに話す事自体初めてだが、限界だった私は自棄になつて返答した。

最近では無口気味だったから、言葉がすらすらと吐き出された。

「平凡な俺に言わせて貰えば、こんなの唯の悪い夢、悪い冗談だ。多少の悪足掻きくらい多目に見てくれよ。こんな幼気な子供捕まえて化け物扱い。挙げ句の果てに、親父には殺され掛けんだ。笑えんぜ。元はと言えば、封印したのはあの野郎だったのによ。こんな里とつと滅んじまえばいいんだけどな」

「『……………』」

沈黙する化け狸。まあ仕方ない。

目つきが年齢不相応とは言え、幼い少年の言葉の数々。想像してほしい。自ずと答えが出る。

けれど、止まらない。

こんなに喋ったのは前世以来だ。私は鬱憤を晴らすかのように、前世の事を含め全て語った。

元々、私は原作の我愛羅のように寡黙少年ではない。平均的な女子高生とおなじ程度には、おしゃれして、お喋りをして、遊び回つて……………そんな普通の女の子だったのだ。この口汚さは、女口調を直そうと努力した結果だった。

「『滅ボシヤアイイジャネエカ』」

「え……？」

「『暴レテエナラオレヲ出セ。文句ガアルナラ反抗シロ。オレア止メネエゼ』」

「簡単に言ってくれやがって。そんな面倒な事したかねえし、あんたの口車に乗る気はない」

「『チツ、人間ッテナア臆病ダナア。出来モシネエ事ヲ平気デロニシヤガル。オレア暴レ足りネエツ！』」

化け狸は、再び私の裡で叫び、暴れ出す。

臆病者で結構。愚痴は愚痴でしかないのだ。原作の我愛羅同様の修羅になるつもりは毛頭ない。

殺し云々は否定しないし、今更出来ない。けれど感情のままに暴走したいと思わないだけだ。

「あんたが暴れたいだけじゃねえか。んとに、毎晩毎晩うるせえ野郎だな。自分の立場を理解してつか？俺が死んだらあんたも道連れでおっ死ぬんだよ。口にしたかねえがよ、言わば運命共同体、一心同体ってえ奴だ」

……………。

守鶴が妙な間を維持した。

そして、その静けさを破った守鶴が、身体中に響く程の煩い狂笑で嗤い出した。

「『ヒヤハハハハッ！ソナ事ヲ言ウ宿主ハテメエガ初メテダ。クク、テメエニハ興味ガ出テキタ。イイゼエ、テメエニオレノ力ヲ貸シタル。ダガ勘違イスンナヨ、テメエノタメジャネエ！少シデモ氣イヌケバオレハイツデモテメエヲ乗ッ取ッテヤルカラナア！』」

私は守鶴の突然の宣言に驚愕する。

嘘か真か定かでないけれど、守鶴が愉しんでいる事だけは本当のように見えた。何れにせよ、脅しに効果があつたとは思えない。

「……なんか恐えな。そんな事あんたに言われつと。俺に選択肢なんざねえし、利用させて貰うしかねえじゃねえか」

守鶴を全面的に信用する訳じゃないけれど……。とりあえず、この同居人と共に在る限り話に乗る他無い。

私の平穩の為に……。私自身の生き残りを賭けた人生の為に……。

第二訓

某月某日（晴）

久方ぶりに姉兄と夜叉丸を交え、食事をした。

夜叉丸の訝しげな視線が突き刺さる。

まあ1年余りの間、外出皆無の私が突然そんな事をすれば、訝しむのは当然か。

だがこのまま何もしない訳にもいかない。

「ええと、……うん。まずアレだ。そんな訳で、俺様魔改造計画を開始します」

「突然突拍子ない事言い出したじゃん!？」

「まかい、ぞう？な、何を言ってるんだ。我愛羅は」

対面する姉兄は、当然の如く私の奇行と無口だった時の変わりように啞然した。何故無口が一転したのかは、よくよく思い至ったのだが、原作の我愛羅とおなじ振る舞いをする必要はないと思ったからだ。

元々口調とて違う。流石に女言葉は気をつけねばならないが。この幼い我愛羅の現在の可愛らしいソプラノボイスでも、それは無い。ただ、この口汚さは最早改善不可の域だけれど。

「何って……。要は修行するってこった」

「誰が？」

「俺意外に誰がいるってんだよ」

ジト目で2人の素っ惚けぶりに呆れる。

魔改造だの言い過ぎだったが、修行くらいで大袈裟な奴らだ。

「我愛羅は今のままで充分強いじゃん」

「そ、そうだよ。それに何があったんだい？人が変わったみたいだよ」

私への恐怖が抜けきらないのか、信じられないと言いたげな顔の姉兄。

特にテマリだが、その幻滅したみたいな表情はなんなのか。

「強くなんざねえよ。あとテマちゃん。俺はこっちが素だったの」

実際、私は強くない。確かに、今まで里の最終兵器として育って来たし、普段から背負う瓢箪のお陰で腕力はあるけど、…所詮それ止まりだ。

ここまで、私が生きてこられたのは半分守鶴のお陰と言っていい。(皮肉なものだが) そうでなければ、上忍級の忍相手に戦う所か、殺すなど出来ない。だが、このままでいい筈もない。

「テ、テマ…テマリの事か？やっぱ、変わり過ぎじゃん」

「しつけえなあ、貴様は黙って人形遊びでもしとけや。多分きつと一生彼女なんざ出来ねえと思うけどな」

「お、おまつ、今言っちゃいけねえ事サラツと言ったじゃん!？」

「…我愛羅が、我愛羅が壊れちゃった…」

この際カオス姉兄は無視だ無視。

まあ夜叉丸に食事の礼を言つと変な顔をされたのだけけど。

■ □
■ ■

久方ぶりに守鶴以外とこんなに言葉を交わす。

最近では、自ら人との交流を避けて来たけれど、幾分か気分が高揚するのが分かる。

表情筋が緩々の感覚だったが、窓硝子に写る私（”我愛羅”）の顔が思ったよりずっと固い。良くて、無表情に薄笑みを浮かべる程度だ。納得出来ずに眉を寄せると、誰が観ても悪党にしか見えない。
… 酷く悲しくなった。

「我愛羅様」

夜叉丸が食器洗いが済んで、戻って来た。

傍目に観ると、お馬鹿としか言えない私の行動の筈が、夜叉丸は気づかず声を掛けた。

様づけされる事には慣れたが、未だ違和感が残る。

「なんだ、夜叉丸」

「……あの、何かありましたか？」

こんな質問は予想の範囲内だ。急に態度が変われば、仕方ない。

ここで、「守鶴のおかげでな」などといえ、彼は間違い無く混乱する。言ってみたい欲求、好奇心や悪戯心をくすぐったが、流石にそれは本気でしようと思わない。

恐らく驚愕に染まった顔を変貌させ、憎悪のままに襲って来るくら

いの想像をする程度。兎も角、そんなIF話はおいとくとして、そんな心配そうに見ないで欲しい。

原作では、愛憎の狭間で苦悩した様子の夜叉丸だが、ソレが芽生える事はないのだ。私には全てが嘘臭く思えてしまう。

元々原作の夜叉丸の出番はそんなに多くはない。実際に優しい人のようだったが、もし私を殺しに来るのなら情け容赦無く殺すつもりだ。

「夜叉丸。まさかと思うけど、おまえまで俺が変とか言う？」

思考とは裏腹に、何食わぬ顔で子供らしく拗ねて見せる。

しかし夜叉丸に納得した様子は無く。寧ろ険しい表情で詰め寄った。

「……いえ。どうして、急に食事に同席する気になられたのかと」

「なんだ、嬉しくねえのか。鬱気味の陰気臭い甥がようやくと立ち直ったつてのによ」

「そんな事ないです…。嬉しいですよ。それに、我愛羅様がこんなに元気な方だと思いませんでしたから、驚きました」

微笑んだ夜叉丸は、厭味なまでに綺麗で、ドス黒い憎悪を秘めた人間には見えなかった。

「ま、実際こんなもんだって。特に特別な事なんざねえよ」

未来の知識が在ると言うのも厄介なものだ。

まあ私の存在が、NARUTO世界にどんな影響を与えるのか、未来を識っているアドバンテージがどれだけ通じるのか、解らない以上する事には変わらないのだけれど。

「ええ、姉さんもきつと天国で喜んでいることでしょう」

儚い微笑みが、精神的に追い詰められている事を如実に知らせる。
もしかしたら既に悩み始めているのかもしれない。

言い知れない不安にかられたが、結局答えをだすのは夜叉丸だ。私は開こうとした口を閉じた。

…。
いつその事、本当に未来予知とか人の心が読めれば楽なのだけれど

…。
もどかしさから可哀想な頭にそんな考えが浮かんだ。

第三訓

某月某日（雲）

未来予知が出来れば…。

そんな傲慢な考えがいけなかったのか。何れにせよ、予め史実を識る私の言えた事じゃなかった。

人間とは、得てして欲深く、傲慢なもの。だとしたら父様は本能に忠実だったのかもしれない。現に、父様だって、昔は優しい人だったのかもしれない。私がそれを知らないだけなのかもしれない。たとえれば桐がないけれど…。

後日、忘れた筈の夢の内容が現実になった時。

転生した事実など目で無いくらいのテンプレ能力を知った。

とりあえず、NARUTO世界に劇場版紫苑がない事を切実に祈った。被るし。

□ ■
■ □

月夜の晩。

星は見えずとも月が爛々と地上を照らす。

美しく映えた満月の夜は、血が騒ぐ。裡なる獣が騒ぎ出す。

「うえ、気持ち悪い。ちょっとポンちゃん、同居人の分際で、家主に迷惑かけてんじゃないよ」

守鶴が協力的になつてから、月の影響が強くなつた気がする。しかし守鶴の協力のお陰で、チャクラコントロールは概ね問題無くなつたけれど、尾獣の能力を発揮する事が難しい。演習場にて、わざわざ私の監視役のバキを呼び出してまで、詳細を聞いたのだが無意味に終わった。（勿論困惑され、説明も拙かった）

仕方無く代わりに影分身の印を請うつて、2倍修行とやらを実戦した。ついでに、苦手な接近戦に必須の体術を克服する為に、組手の相手をして貰った。だいいち、幼少時の基礎なんかの手解きなどは、本来バキから教わつたのだ。不自然な事はいつさい無い。

唯、そのせいで帰宅が遅くなつてしまった。あんまり遅くなると、夜叉丸が捜しに来るかもしれないので、足早に急ぐ。

「『ポンちゃん言ウナ！コノ男女！油断シテンジャネエ！敵ダ！』」
「うお！」

突然、苦無が襲った。しかも起爆札付きだ。爆発が起こったが、砂の盾が展開され、俺は無傷で済んだ。

…油断した事に内心舌打ちした。

「砂瀑柩」

そのまま、”敵”を覆った砂を自らの意思で操り、手の平を翳す。その手を握れば、その者に死を齎す事が出来るのだ。悪態を吐くのは、その後でいい。

人を殺す時に、感情など不要。それが、この世界に生まれ、幼い頃より忍として教育された私が学んだ術だった。

「砂瀑送」 「『待テッ』」

「今度は何だつてんだ！」

「『ソイツノチャクラニ覚エガアル』」

守鶴が珍しく神妙な様子だった。妖魔の中でも高位の存在たる尾獣、守鶴の言なのだ、間違い無い。

そして、私の”生前の知識”の記憶を遡るまでも無く、1人の人間の可能性が浮かんた。

眉を顰めたが、予想出来た現実だったのだと、その表情を消した。その隙が十分に脱出の機を与えた。僅かに意識が逸れ、砂の拘束が流れ落ちたのだ。

「チイツ」

無数の起爆札付きの苦無が私目掛けて飛んだ。飛び退く私に、容赦無く起爆札を投擲した。

恐らくだが、相対者に砂の盾に対抗出来得る術がないのだ。当然オートの砂が邪魔をする。

「夜叉丸、か？」

「……………」

愚問だった。

忍が素姓を証す訳がない。その咄嗟の質問が私の未熟さの顕れだと自覚がある。だが、相手が明かに動揺する気配が伝わった。

夜叉丸と私の関係など僅かなものだ。けれど、出来れば殺したくないと思った。甘い考えなのは承知済みだ。けれど、既に今の私に慈悲など存在しない。

冷酷に染まった心は、冷静そのものだった。

「大方父様の命令つてとこか。言っとくけど、無言は肯定と見なすからな。だが1つ忠告させて貰うと、無口がクールやら格好良いやらと、持て囃されるのなんざ始めのうちだけだ。何れ男子には虐めの対象にされ、それに触発された女子からは、根暗などと謂われのない事実を囁かれるようになるんだ」

「『オイ、ナンノ忠告ダヨ。ヤケニ実感籠モッテンルガ、体験談力』」

「現実の女なんざ皆辛辣なもんなんだよ。ガキの頃は見た目重視かもしれないが、大人になると中身や懐の広さに目がいつちまうらしい」

若干、話が傾く。

前世、母が父との馴れ初め（惚気）を語った際に、煩いくらい力説してくれた。その時の私は、耳掃除に忙しく、殆ど右から左に聞き流したが。

「隠しても無駄のようですね。貴方の仰られた通り、僕は貴方を殺すよう依頼されました。貴方の父親。風影様に」

「『今ノヲスルーシヤガッタコイツヲアル意味尊敬スルゼ』」

全力で同意した。

守鶴の声は勿論私以外に聞こえない。これに、私の独言主張を敢えてスルーした夜叉丸を賞賛すべきか……。今いち緊張感に欠けた私が反省すべきか……。余談だが、守鶴に突っ込みの才能があったらしい。

「まあ、意外だったぜ。おまえがこんな馬鹿な事に参加するなんざ」
「私の方こそ意外でした。ある程度の動揺を予想していましたが、貴方は冷静だった。まるで、こうなる事を予期していたかのようにね」

隠す必要の無くなった顔を覆った布を剥ぎ、普段の穏やかさが嘘のような夜叉丸の無表情の顔を晒した。

マトモに寝ていないのだろう。その顔は裏れたように青ざめ、辟易を滲ませる。

「うすうすな。だがおまえの事だ、断ろうと思えば、断れた話だったんじゃないか？」

夜叉丸が肯定するように、それに懺悔するように瞼を閉じた。

「私は心の奥底で、きつと、貴方を恨んでいた。大好きだった姉の命を奪って、生まれ落ちた貴方を。姉の忘れ形見…、そう思い、私は貴方を愛そうと必死でした」

しかし、無理だったのだと言った夜叉丸の暗い瞳に、最早私の姿を映さなかった。

「姉は、貴方を生むことを望んではいなかった。姉は里の犠牲となり、この里を呪いながら死んだ」

続く言葉は、私が産まれた事への全否定だった。

生憎、私は原作の我愛羅程短慮ではない。母が本当にそんな事を思ったのかなど誰も分らないのだ。夜叉丸の言葉が全てとは思えないし思わない。だが夜叉丸の口から実際に聞くと堪えた。…殺すべき感情が顔を覗く。

私はそんな素振を露程も見せず、仕返しのように夜叉丸を嘲った。

夜叉丸がそんな私を忌々しげに睨んだ。

「今更、死んだ人間の事なんざ興味ねえ。おまえが俺を愛そうと努

力してくれた。その事実だけでいい」

「……では、これだけは言っておきます。貴方の名は姉さんが付けたんです。我愛羅……。我のみを愛する修羅。自分だけを愛しなさい。そして、自分だけの為に戦いなさい。そうすれば貴方は存在し続ける、という願いを込めてね。しかし、姉さんは貴方の身を案じ愛してこの名を付けたんじゃない」

満月を背に、夜叉丸の口唇が残酷な言葉を紡ぎ出した。淡々と語られる言葉を止める気にならない。私自身、麻痺したように沈黙を守った。

「貴方が存在し続けるようにとその名を付けたのは……、この世を恨んで呪いながら死んだ。姉さんの怨念をこの世に存在させ、残し、知らしめる為に！貴方は、愛されてなどいなかった！最期です。死んでくださいっ！」

怨念……それは母のモノで無く、今の夜叉丸のものだと思えない最期の感情だった。

自爆覚悟で、起爆札が貼られた身体諸共突進して来る。けれど私はその場を微動にしない。

結末など分かり切っているのだから。

第四訓（前書き）

書き直しまくってたら遅くなりました。
捏造と勝手な解釈が大部分を占めます。

第四訓

某月某日（晴）

ハローハロー。

月夜の晩、反則的能力に目醒めた「砂の最終兵器」、
「砂瀑の我愛羅」こと異世界出身の元現代人伊藤椿だ。近頃だと、特殊能力が上層部の方にバレて、「予言の我愛羅」などと呼ばれるようになったんだけど…。その辺は、私の力を利用しようがする者と危険視する者の半々。守鶴が暴走しなくなったとは言え、私への評価が変わった訳じゃ無い。今までの事が覆える訳じゃ無いのだ。

逆に、突然優遇視などされたら余計警戒心が沸くだけだ。父様の場合後者だったようだが。当然かもしれない。未来の情報など利用され悪用されて、争いの素となるだけのものだ。父様の判断は、里の長として正しい。けれど、父親としては最低の選択だった。

上役の耄碌老人共の戯言によれば、曰く、過去未来を見通す瞳。曰く、彼の者が言霊が真。……盲信者まで現れ、そんな事をのたまうらしい。

「ぶえつくしよんっ！…誰だよ。俺の噂してんの。まあたバカ影が暗殺でも企んでんのかねえ」

「『元女ノ割ニヤ女ヲシサノ欠片モネエクシヤミシテンジャネエヨ』」



アカデミー

砂隠れの里の忍者学校、下忍にも満たぬ忍の卵達が通う学校。私には、場違いな場所と断言していい。けれど先日、上忍の暗殺者すら返り討ちにし、特例任務を与えられる身で、今更忍者学校に通えとの命令がくだった。正直凄く複雑な気分になった。既に10の私が今更…、と。

飛び級さえ夢じゃないけれど。こんな低レベルな下の下の忍の中で優秀も糞もないような気がするのだ。早く卒業しようと急ぐ理由も無いし。

それに、深夜の殆どに任務を言い渡され、暗殺者に狙われ、出歩くと蔑視され、気の休まる時が無いのだ。守鶴が自重してくれているものの、夜が活発なので寝る訳にいかない。結果的に、睡眠時間が授業中くらいしか無く。その授業中、情眠中、関係無く常時暇さえあれば、指先に螺旋丸を形成するチャクラコントロールの高等訓練さえ行っていた。勿論通常螺旋丸は会得してます。”我愛羅”の才能には驚かされてばかりだ。内心自画自賛した。

帰宅後に、バキを師事するテマリやカンクロウに交じって、組手や忍術の模擬戦なんかの訓練が日課と化していた。私の監視も出来るので一石二鳥と言ったところか。

最近では、バキの指導の賜物か、体術面が相当伸びたくらいだ。砂の防御と攻撃とに相当の自負があるけれど、螺旋丸を直接あてるには接近する必要がある。砂の盾が無効化された場合に備えたい。遅かれ早かれ、接近術は必要になってくるのだ。鉄壁の防御が絶対でない事は、原作のリー戦とサスケ戦が証明している。

そして、攻撃回避さえ未来視、先読み出来る私の能力だが、…視れるだけでは回避出来ない。回避するだけの身体能力や技能が求め

られる。

「その年でその実力があれば上出来だ。だが調子に乗るなよ。鍛錬を怠るな」

「オッス！」

「『暑苦シイ奴ラダナ。テメエハソンナキャラダツタカ？』」

……。

始めに、おふざけでリーとガイのノリを真似たら、バキが気合いの籠もった返事が気にいったとかなんとかで、訓練の時の返事がこれに固定されたのだ。慣れれば清々しい。

ただ、テマリとカンクロウが時折遠い目をする事があるのは…、まあ仕方のない犠牲と思えば安いもの。

「お疲れ様。我愛羅」

「…よう、流石だったじゃん」

「あ、おつかえり。テマちゃんとカンちゃんは任務だったんだよね。どんなだったんだ？」

「あたし達もまだ下忍だからね。そんなに難しい任務じゃないよ」「難しい所かへばかったじゃん」

カンクロウが手持ち無沙汰に傀儡烏を弄ぶ。

折角持ち込んだが使い所が無く、無駄になったようだ。弟の年相応にふて腐れた姿にテマリが呆れ、私が苦笑いを浮かべた。

「ま、下忍なんざそんなもんだって。カンちゃんはハリキリ過ぎなんだよ」

「ほんとだよ。全く。何期待してたんだか」

「う、なんだよ！だいたい終始やる気のない我愛羅に言われたくねえじゃん」

否定はしない。

私が真面目なのは、基本的に修行中の訓練の時か、気紛れに体術の授業に参加する時くらいだ。

しかし、これは仕方のない事だと言い張れる自信がある。

誰だって、長時間教室に居座ると畏怖の視線やら嫌悪の視線やらに晒されるのが当たり前前の空間に長居したくない筈だ。

「その事について、以前から俺も言おうと思っていたんだが。我愛羅、偶には真面目に授業に出てくれないか。このままじゃ卒業出来ないぞ」

「ほら、やっぱそんなこつたろうと思ったじゃん。あんなところ卒業出来ねえってどんだけサボってんだよ」

「いいじゃねえか、授業に出なくなつて俺様が強くなりや」

「でも我愛羅…。どんなに優秀でも素行が悪いと危ないかもしれないよ」

テマリ言葉に、今度こそ言い淀んだ。

確かにそれは拙いかもしれない。だが迫害には慣れたとは言え、あの視線の中で正気を保てる自信が無いのだ。

今でこそ、落ち着いてきたが、里抜けしようかと思つた回数は数知れない。里の壊滅を妄想した思考は数知れない。

迫害に慣れ、殺す事に慣れ、人の死に慣れ、理不尽な世を見慣れ、汚い忍の不条理に慣れたけれど。…果たして、そんな里に私が執着する理由があるのか。テマリやカンクロウと姉弟らしくなった事に關しては、嬉しいけれど。

「あーあ…。木ノ葉の方がまだマシだな」

「木ノ葉？なんで木ノ葉が出てくんだよ」

「平和だし美人や美形が多いしさ。目の保養があればちつとくれえ

「氣力が上がるってもんだ」

「おまえ、そんな理由でやる気ねえの!？」

事実、木の葉隠れはナルト達世代に九尾の事を知る子供はいない。大人に感化される子供はいるかもしれないが、この里に比べればナルトの扱いは幾分かマシだ。原作の白を見れば分かるけれど、霧隠れや他里の血継限界の人々の方が余程酷いかもしれない。

ナルトはナルトで、あの迫害の中でよく捻くれなかったと尊敬する。木の葉に美人や美形が多そうなのは本当だが。

「志氣が高まるのはいい事だと思うぜ。ま、目の保養も何もない力ンちゃんの出直してくれ。そのままじゃ折角の風影の息子の肩書きを使いこなせねえぜ？」

「ほつとけ! つうかそんな目で俺を見るな! 余計なお世話じゃん! ?」

それに、他国との争いが絶えない風の国が、安全とは言い難い。その点、火の国(木の葉隠れの里)は他の里と比べるべくも無い。九尾事件から凡そ10年と立たずして、里をそこまで修復出来た事実は、やはり3代目の手腕と見ていい。羨ましい限りだ。あと数年後には、私の裡の守鶴を要とした計画が行われるまでの平穏だけだ。

「うん。そんな訳なんで……、決めた! 俺は木の葉の忍アカデミー者学校に行く事にする」

第五訓

某月某日（雲）

「俺の名を訊きたいのなら自分から名乗れ。好きなものは和食。歌。平和。美人と美形と可愛い娘は大歓迎。嫌いなものなら虫類全般。趣味が喋る事と歌う事。話すっていいよな。リリンが生んだ究極の共通言語だぜ。将来の夢ねえ…、死ぬ時まで悔いのねえ人生を送れたら十分か。以上。この中に俺の言葉が理解出来た奴、ついでに異世界人がいたら俺様の所に来い。んじゃよろしく頼むぜ、木の葉の諸君」

あんぐり。

私からしたらお約束の自己紹介だったが、このNARUTO世界の住人にとつたら余程インパクトが強かったらしい。

私の雰囲気が独特だったのもあったかもしれない。たしかに、元々異世界の人間だったのだし、当然違和感が無い訳じゃない。それに、上下黒の忍服に背中に背負った瓢箪が特に異彩、瞳の周辺の濃い隈と額の「愛」の刺青が人の記憶には、酷く印象深いためだ。

ともあれ、木ノ葉隠れの里に留学する事に成功した。駄目元だったけれど、拍子抜けする程すんなり認められた。同盟国の木ノ葉に風影の息子が留学するのが、差程難しくなく、私の厄介払いを兼ねての処置と容易に想像がついた。

今の私には、この場の皆の反応が、監視の目、刺客への配慮、里人の不躰な視線、その全てから解放された証のように思えた。否、事実解放されたのだ。

若干1名呆気にとられる事無く、チヨウジらしき少年がお菓子を貪る音がBGMのごとく響いた。隣のIQ200の天才少年がシカマルのようだ。

その他、サスケにキバと言った主要メンバーがちらほら伺える。皆、あどけない顔で、間抜け面を晒す様が笑えた。

「ギ、ギリギリセーフだってばよ！」

だが、すぐに込み上げた笑いが霧散した。

「うずまきナルト、只今到着！」

誰かと思えば、自己主張の激しい主人公ナルトであった。

お陰で、注目の的がナルトへと移った。担任教師のうみのイルカは、満面の笑顔で場違いな叫びを上げるナルトに怒りを露わにして、全身を震わせる。

いっぽう、ナルトは目立った事が嬉しいらしく照れ笑い、漸く私の存在を認識してくれた。

「あれ？おまえ誰だってばよ」

「所謂、転校生ってえ奴だ。それから少年。相手に名を訊ねる時は自分から名乗るもんだぜ」

「む。それやそうだけど、なんか偉そうでム力つくってばよ。俺はうずまきナルト！将来火影になる男だ！覚えとけ！」

「ナル君な。偉く威勢がいいこった。俺は我愛羅ってんだ。ま、男の夢はデカイ方がいいよな。程々にがんばんな」

苦笑を浮かべ、ぐしゃぐしゃと髪を乱暴に掻き回す。

それ程意外な言葉だったのか、ナルトがきょとんと目を丸くした。よく見れば、相当整った顔だ。流石あの美男美女の子供。主人公とは結局の所、美形か美人と相場が決まっているのだ。

「にしし、おまえいい奴だってばよ！俺そんな事言われたの初めて

！」

「ああ、まずは遅刻しないようにすることだな。そんなんじゃ火影なんざ務まらねえぜ」

「むう……。やっぱイヤな奴だつてばよ！」

周囲に密やかな笑いが巻き起こった。

私は断じて、風影になるつもりなどない。権力があつた方が何かと便利だと再確認したものの、縛られたくはない。

元来人柱力が裏切らないよう、「影」の肉親関係に封印する事が多いらしい。8尾の人柱力キラービーがその例で、そんな私こそ風影の息子なのだけれど。私の場合はその肉親の風影に既に見限られた最早、私に里を守る意思は完全に無くなった。

風影の父様が死んでしまつたら、上役連中の陰謀に頭を痛めることになるかもしれない。

「ナルト！おまえは我愛羅の言つた通り大遅刻なんだ！罰として放課後居残れ」

「ええええ！」

反省の様子が全く見られないナルトの態度に、イルカのボルテージが上昇する。

恐らく、長びく説教のお陰で今回の授業が潰れることは間違いない。不満たらたらナルトを見るに、1時間所か2時間潰れるかもしれない。

私は所々の空席に目を彷徨わせ、座席に迷っているとシカマルと視線がかち合った。

「隣いいか？」

「ああ。俺は奈良シカマル。おまえは？」

「僕は秋道チヨウジね。よろしく」

「おう。砂瀑の我愛羅だ。よろしくな。シカちゃんとチョウジ君」
律儀な子だ。

ナルトとの会話中になまえが聴こえた筈なのだけけれど。私が先に名乗れと言った事を律儀に護ったようだ。

「…シカちゃんは止めてくれ。俺の事はシカマルでいい」

「んなこたどつちでもいいじゃねえか。男が小せえ事気にしてつとモテねえぞ。ナル君を見習え」

私のこれは癖みたいなものだ。それに、実際精神上年が離れ過ぎなのだから仕方ない。考えなくなかったが、今や力カシより上の筈だった。

「おお！おまえ、我愛羅だっけ？中々いいこと言うつてばよ！」

「たく、めんどくせえ奴が来やがった。やけに早かねえか？」

どうやらイルカは、生徒達を放置しない方を選んだようだ。ナルトへのお咎めは、愛の鉄拳、基頭のたんこぶが証明した。

しかし、そこで大人しく引き下がるナルトではなかった。根暗の私とは、大違いの天真爛漫を最大限発揮してくれる。

「なあなあ！そんな事よかさ。ずっと気になってたんだけど、その瓢箪なんなんだ！？」

「ふっ、よくぞ訊いてくれた。まずはこの瓢箪を擦るんだ。きっと願いを叶える魔神的なおっさんやら幼女を誘拐するような似非ピータパンやらが夢と希望への扉に誘ってくれる筈だ！」

「よく分かんねえけど凄えつてばよ！俺やってみたってば！」

「おい、十分怪しいじゃねえか。嘘臭いからやめとけて」

「ねえ、静かにしないとまずいんじゃない？」

俺は知らねえと傍観を決め込んだシカマル。

けれど、座学が嫌いだった私は構わずナルトをからかうのに徹した。純粹に信じ込んだナルトに世間の厳しさを教えねばならない。

それはイルカがキレる5秒前の出来事だった。

第六訓（前書き）

予想以上にシリアスになってしまいました。

こんな筈じゃ……。早くヒナタを出してえ。ネジ兄さんを出してえ。
今はこの似非ガアラを7班にいれようか悩んでいます。

第六訓

某月某日（雨）

「何、木ノ葉の忍者学校に通いたいだと？」
アカデミー

「はい。故に、許可を頂きたい」

「まあ良い。火の国と風の国は同盟国。私直々に申請しておく」

風影自身、この膠着状態と言える関係に憂いていたのかもしれない。それが父様の親としての最後の言葉だったのかは解らないけれど。私は最後になるかもしれない忠告を残した。

「有難う御座います。では息子として、1つ予言をいたしましょう。陰湿で執念深い蛇につけ込まれぬようお気をつけください」

□ ■
■ □

木ノ葉隠れの里。

響く遽しい足音に神経を尖らせる。

火影執務室の扉が乱暴に開かれ、私の機嫌は更に急降下した。

苛々を緩和するために机の上に置かれた煎餅に無造作に手を伸ばす。

「これはいつたいなんのつもりじゃ」

「あら。遅かったじゃねえの火影ちゃん。そこんどこ里長としてダメダメなんじゃねえ？」

私は殺気立つた3代目火影を無視して、ソファに座ったままバリバリと煎餅を食う。

私の態度と火影への暴言に痺れを切らした暗部が3代目を庇うように姿を現した。

「貴様！」

「待たんか！今そ奴と話するのはわしじゃ」

「しかしっ」

「よい！お主らは下がっておれ。見れば判る。そ奴に敵意はかんじぬ」

3代目火影、猿飛ヒルゼンが私の目の前のソファに腰掛けた。流石に腐っても火影。意外に冷静だ。

「して、何故あのような事をしたのだ？」

「あん？なんのことだか解んねえな。主語をいれてくれや」

素知らぬ顔の私に、先程火影に下がれと命じられた暗部が、隠れた場所から殺気が放たれる。

今度は3代目は咎める事をしない。

「一般人と屋敷の者に危害を加えた事じゃ。幸い皆気絶しとっただけじゃがな」

「んな事が…。前者の奴らの件は、まあ自業自得だな。後者は正当防衛。火影への面会を断られたから実力行使に出たってただけだ」

「言いたいことは間々あるが、一般の者達の件が分からぬ。何かお主を怒らせるような事をしたのか？あ奴らは忍ではないのだぞ」

「…関係ねえな。10才の子供をいたぶって喜んでんだ。当然の報いじゃねえか」

3代目の老い耄れた瞳が見開かれた。

私の冷めた瞳を真実と受けとった3代目が、信じられないと驚愕する。

里の者を皆家族と豪語する老人だ。仕方ない事かもしれないが、流石に無責任過ぎやしないか。

4代目とクシナがこの場にいれば、3代目を烈火のごとく怒ったかもしれない。

「それは確かか？」

「はっ、くだらねえこと訊くんじゃねえよ。この際そんなん関係ねえ。木ノ葉の現状なんざ今更過ぎる事実だ。この里程狂ったとこなんざ早々ねえが…。英雄の息子にあんな扱いが出来るくれえだ。さぞ上等な里人達なんだな。4代目が見たらなんと云うのか…。こんな里を救うんじゃないかと嘆くのか。呆れんのか。憎むのか。ただ怒んのか。ま、所詮とつくに死んじまった人間のこった。軽く聞き流して構わねえが」

3代目の表情が徐々に歪んだ。いつたい誰の事なのかなど愚問。

身を隠す暗部の気配には困惑と疑心、1人程絶句する者がいるようだが、多分力カシだと思われる。

私は3代目の瞳をまじまじと覗き込んだ。

その思考を見透かのすように…。

「…ナルトの事、かの。なる程。「予言の我愛羅」の名は伊達では無いということか。お主が、この里の事をどこまで把握しておるか

は知らぬが、他里の者が口を挟まんでもらおうか」

漸く紡がれた声が、3代目の心情を露わにした。表情は比較的険しいものだ。

勘違いしたようだが、生憎と過去視した訳じゃない。過去なら多少は史実として、事前に知識がある。この能力には、相応とまでは言わないけれど欠点があるのだ。極力使用したくない。

無意識に人の過去や未来の情報が脳に流れる事もしばしばある。覚醒したばかりの頃は2、3日動けず、今でも半日か丸1日頭痛に悩まされる。戦闘に支障が出るのはなるべく避けたい。

「ふうん。口を挟むな、ねえ。俺はナルトとおなじ人柱力なんだが、忌み子の事なんざ見ぬフリか。とんだ火影様だこつた」

「…耳が痛いな」

否、ナルトを孫のように扱っていた3代目が、心を痛める事くらい解っていたのだ。どれ程かの苦悩と葛藤をへたのか知れない。

けれど、隠れ里の長が1人の人間を贖する訳にいかないのは事実。それが里の忌み子、嫌われ者を庇おうものなら尚の事。里人達の反感や反発を買う事になるのは明白だった。

「まあいいさ。そんな些末なこと。俺はあんたを苛めに来たんじゃねえことは勿論、説教かましに来たんでもねえかな。本題はこれから」

「本題じゃと？」

「俺はナルトに最低限の身を守る術を教えたいと考えてる。それにはナルトが、今の自分の立場をきちんと理解する必要がある。邪魔する気なら相応の対応をとらせてもらっぜ」

「何!？」

ザワリと周囲に緊張が走った。

「あんたらに止める権利なんざねえ。文句言われる筋合なんざ更にねえな。3代目、貴方の事が嫌いな訳じゃないんだ。これ以上私を失望させないでください」

だいたいナルトに隠す必要性をかんじない。

当事者自身が無知なことが、どれ程厄介な事か。親の名すら秘匿するのも解らない。

ナルトはたしかに「波風ミナト」と「うずまきクシナ」の実子だ。

里の者に秘匿するのは仕方ないとして。ナルトに話さない理由が釈然としないものがある。

単に里や4代目を憎んで復讐するのを恐れてるのかもしれないけれど。

最低限の力は備えたい。精神修行を中心に、体術やチャクラコントロール、兎に角忍術以外の基礎を徹底的に叩き込む。

忍術の方は、原作開始と共に学べばいい。ただ、原作のナルトよりほんの少し楽が出来ればと思いたい。

馬鹿を直すのは無理かもしれないが。

「だ、だが…！」

「人柱力が力を誇示すれば危険視される。だが何れは命を狙われます。貴方はナルトが殺されてもいいと仰るのか？」

3代目が苦しげに唸った。

罪悪感を抱くのは勝手だが、火影として甘過ぎる。そんなものつけ込んでくれと言っているようなものだ。

「決まりですね。くれぐれも邪魔だけはしないでくださいね。私はこれで失礼しますが、先程の数々の非礼はお詫びいたします。申し

訳ありませんでした」

恐らく処罰はされないだろう。

里の者を殺さなかったとは言え、普通はなんらかの処罰を下されるが、私は風影の息子、処罰を与えたとなればそれこそ外交問題に発展する。

故に、謝罪だけはしておいた。

その際の3代目の表情が、純粹な驚きに染まった。
失礼な人だ。

第七訓（前書き）

冒頭は三人称。

第七訓

某月某日（晴）

先日変人が留学生としてやって来た。

彼の名は我愛羅。

既に忍者学校内に、彼の名を知らぬ者は少ない。
アカデミー

彼の何がおかしいのかを述べる事が、皆にとって今更の事のようにだ。

兎に角、彼は当初から浮いた。見た目に加え、雰囲気と存在感。明かに我が道を行く少年だったのだ。

ただ、彼のする事なす事奇怪のひと言…。

まず、彼の奇行その1教室中をを鮮やかな華に埋め尽くす。彼の奇行その2校庭の落書事件、その言葉のまま学校の校庭に難解な暗号を書く。彼の奇行その3老若男女問わず、美男美女をナンパしまくる。（勿論恋愛的な意味は含まない）

…以上の事を踏まえ、彼は変人と認定される事となった。けれど、同時に彼は座学以外優秀で、総合成績は常にトップの秀才でもあった。

そんなひと癖ふた癖ある彼に、勝負を挑もうとする奇特な少年がいた。

真実はべつとして、悲劇の一族の末裔たる少年が、戦闘狂のごとく高々と宣戦布告したのだ。

「俺と戦え！」

■ □
□ ■

忍者の卵にしては、気配の消し方がうまいかもしれないが、肝心の私にはバレバレの尾行だった。

何のつもりかは知らないけれど、学校を下校した後をずっとつけられているのだ。態と人気のない場所へ誘導するが、未だ姿を現す様子が無い。

嫌がらせの類か知らないけれど、いい加減に鬱陶しい。大方、今日の体術の授業にサスケをKOした事が原因だと思われる。（その際の自動防御の砂はOF状態）

あんな妬ましい嫉妬の視線に、私が気づかないと思ったのか。だとしたら随分舐められたものだ。実際、単に何も考えていないのかもされないが。否、何も考えていないに違いない。

中々現れない某悲劇の少年が、姿を現し易いよう人気のない演習場に行くことにした。私から声を掛ける気は全くない。

木々に囲まれた木ノ葉の里らしい道に、自然と口ずさんだ。

「まーるたけえーびすにおしおーいけー。あねさんろっかくたここにしきー。しあやぶったかまつまんごーじょー。せったちやらちらうおのたな」

歌はいい。

世界と違い、変わる事のない歌詞に満足する。

演習場に到着すると、漸く悲劇の少年、基うちはサスケが背後に現れた気配があった。

案の定、くると華麗に回れ右すると、私を睨みつける少年が1人佇んでいた。だが急に振り返った事に驚くサスケの様子は間抜けだった。本当に気づいていないと思っただけらしい。

けれど、サスケの瞳にはアリアリと敵意が浮かんでいた。

「ん？さっちゃんじゃねえか。何か用か？それか迷子だったか」

「そのよび方すんな！迷子じゃねえ！」

「そんなに怒る事ないじゃねえか。カルシウム不足か？カルシウムは毎日とつとけよ。カルシウムさえとつときゃ全て上手くいく」

「んな訳あるか！そんなんで上手くいくんなら今頃オレは世界最強なんだよ！」

「あ、毎日ちゃんと牛乳飲んでたんだ。男の子だもんな。身長くらい気にする年頃か…」

生暖かい視線を送る。

純情少年サスケがトマトのように赤面した。図星だったようだ。

このままサスケの用とやらを有耶無耶に出来ればいいのだが。

「う、五月蠅い！そんなことはどうだっていい！」

正直、真面目に少年の相手をしたくない。話て見たなら少しは印象が変わるかと思っただが、前世と変わらず、私はサスケを好意的に見られない。原作同様の復讐者の彼を特に。

結局、自尊心だけは1任前の彼が、不甲斐ない自分を認められないだけなのだ。一族の事然り…。兄の事然り…。

イタチの真実を知った原作のサスケなど、悲劇じゃなく喜劇の主人公だった。原作を読んだ時、友人が泣けたと言った理由が解った。けれど私はあまりのことに呆れた。勿論後悔した無様な自称復讐者の少年に。拳句、木ノ葉を潰すと宣言した少年には侮蔑しか無い。最後の最後まで、イタチの気持ちを汲まずに自分の事を優先しやが

ったのだ。当然の反応だ。たしかにイタチの生様には泣かされたが、サスケには心底失望してしまった覚えがある。

「俺と戦え！」

「やだ」

間髪いれずに即答した。まあそんな事だと思っていたけれど。
…付き合いきれない。

「なんだと！」

「寝言は寝て言え。今のおまえじゃ話にならねえ。責めて、気配くらい悟られねえようになれ。俺がおまえの尾行に気づかないと思っ
たか？」

「……ッ！ふざけんな！本当に話にならないか試してみやがれ！火遁業火球の術！」

単純過ぎる。

忍が感情任せに突っ込む場合の理由がだいたい2つある。

1つ目が、夜叉丸のように圧倒的実力差に死を覚悟した場合。2つ
目が己自身が敵を圧倒し得る力がある場合のみだ。

無策の攻撃が中る事などまず無い。

だが悲劇を訂正して、喜劇の少年の視界に写る私は、見事業火球が
直撃したかのように見えたらしい。

「へっ」

得意気に嗤ったその阿呆に流石に腹が立った。

「何笑ってやがんだ。随分余裕だな」

「な……!？」

瞬身の術を使用するのは馬鹿らしい。それ程問題無く避けられる程度のものだった。本来は避ける必要すら無かったが、サスケの背後に回った。

やけに簡単過ぎて、畏かと疑った程だ。サスケから見たら、背後に突如現れた私が体を退いたサスケの額を弾いた。

「つつ！」

「たわけ。才能に胡挫かきやがって…。付き合いきれん。俺は行く」
「ま、待て！」

完全に無視した。

術を磨くのは構わないが扱いきれない術を使うなと言いたい。

そもそも血反吐を吐く程の努力をしていれば、誰より強くなれる筈なのだが…。兄に復讐したいと言う割に甘い。

原作の中忍試験時を思い返せば解るが、1ヶ月程度で覆った実力がサスケの異常な才能を顕していた。それなのに、その時まで実力が下忍程度だった理由など簡単だ。努力をしない者に結果はついてこない。

カカシやイタチがあこの年齢に中忍や暗部なんかになれたのは、戦乱の世を生きた結果なんじゃないかと推測出来るが。（当然才能は必要だけれど）

「そのプライドの高さをなんとかしたら、勝負くらいしてやるさ」

典型的なエリート思考と、兄に対するコンプレックスを考えると無理だと思っただが、敢えて言っただけでやる。

サスケに自尊心が無くなったらサスケじゃない。

第八訓

某月某日（晴）

べつに、木ノ葉に愛着が沸いた訳じゃない。

単に、木ノ葉が今現在、もっとも平穏な里だったから…。この里を訪れた理由などその程度の些末な事だ。

まあ、今更、原作介入を防ぐ気など無く、無理な事。木ノ葉崩しが行われるのは、最早確定事項と見た方がいい。元々、木ノ葉や砂が壊滅しようが襲撃を受けようが知った事じゃない。今の所、姉さんや兄さん以外擁護する気がないのだ。

もし私が人柱力じゃ無かったら、暁に荷担しようかと思っただけだ。勿論、長門^{ペイン}の方が…。原作のナルトは、彼の描く「平和」を否定したが、生憎私は否定しきれないと思えてしまう。ある意味、長門の描く「平和」が正解だし、現実的だからだ。ナルトの描く「理想」が現実起こったら、凄い事だが。

ただ、ナルトと関わってしまった件は、予定外だった。当初、こんなに世話を焼く筈じゃ無かったのだ。自身と似た境遇のナルトに、真相を語った事自体に後悔した訳じゃないけれど…。

「第7班！春野サクラ、うずまきナルト、うちはサスケ、それと…我愛羅」

これは予測済みだった。

だが無理矢理の組合わせ過ぎやしないか。

うちの写輪眼と人柱力が2人と+α。これのどの辺にバランスを考えた痕跡があるのかお聞かせ願いたいものだ。

逆に、このメンバーの中ではサクラの方が浮いてしまいかねない。

■
□

班編成日。

ついに原作突入が本格化する日。勿論ナルトは試験に合格した。まあ私が多少鍛えたとは言え、件のミズキの巻物窃盗事件の原作乖離が起こることは無く。無事、原作に沿ったナルト自身が解決してくれた。

たしかに私が行った修行と言えば、主に体術とチャクラコントロールに必要な精神鍛錬など。けれど、分身の術くらい出来るかと思っただが、試験当日の結果失格。ここに来て、修正力が働いたのか、改変した事と言ったら、原作よりナルトの怪我が少なく、チャクラコントロールのおかげか結構早めに影分身が発動した事か。

「ヒツナちゃん！愛たかったぜ！」

「ひゃ！が、我愛羅君！愛じゃないよ。字が違うよ」

私は教室に訪れ、すぐ様行動に移った。班編成は男女混合のため、男子に混じった目当ての少女を発見したのだ。

その少女、ヒナタは抱きつかれ、あわあわとしながら訂正を忘れない。流石私の嫁。私の癒やしだ。

「このままじゃヒナちゃんと離れ離れになっちまうかもしれない。」

だが安心してくれ！寂しがるこたあねえ！俺様特性のこの御守りをやる！」

「御守り？」

可愛らしく首を傾げたヒナタに深く首肯する。

私手製のすとらっぷ型我愛羅君人形だ。呪詛の類は仕掛けていないから安心して欲しい。分かる奴には分かると思うが、勿論砂で創った。

「ふっ、ただのますこつと人形だと思ったら大間違いだ！ピンチの時にこの人形にチャクラを込めてくれれば、すぐにヒナちゃんの危機を察知した俺様がすっ飛んでくるつつう寸法だ！」

「それはそれで恐いような気がするんだけど」

「同感だ。つつかななもんいつ創ったんだよ。あいかわらず、変なことに力いれる奴だな」

私の力説に難色を示すチョウジとシカマル。ヒナタと言えば、期待していた反応は得られず。

怯えたように近くにいたキバの後に隠れた。

「ナルト退け！私はあんたの向こう側に座りたいのよ！」

私が恨めしげにキバを睨んだ反対側。

ナルトがサクラに怒鳴られている。見るからにへこんだナルトは、原作同様サクラに好意があるようだ。サスケを例のごとく睨み続ける。

私が介入したうえに、精神修行までやらせたのに関わらず、ナルトのお馬鹿属性があまり改善され無かったのが悔やまれる。

実力に関しては、里人を刺激しない程度に抑えるよう説得した。最終的に納得してくれたものの、もしかしたらその事がストレスにな

ったのかもしれない。何はともあれ、原作よりはましだと思いたい。

「ナル君、そんな奴気にすんな。時間の無駄だ。こっち来い」

「我愛羅…。分かったってばよ」

抑えが効くらしい。

サスケが私を睨みつけてくるが無視。ナルトだが、原作のように真正面からがんつけない辺り成長したのかもしれない。

放置しておくとかかしら突飛な行動に出かねないナルトを隣に座らせた。ナルトとサスケの見苦しい接触を目撃したくないのだ。

変わりに思わぬ事が起こった。

「何の用だ」

愛想の欠片すら無いサスケが私の真正面へと現れたのだ。仕方無く口を開くと、失礼なことに眉間の皺を深くし、仏頂面が増した。

更に、何やら言葉を紡ごうとして、誰かに押されたのか前のめりに倒れ込む。その態勢でいくと恐ろしい事が起こる。

驚愕した私が、咄嗟に体を動かした。

「ぐぶあ」

あっ！と思ったが、時既に遅く。めり込む拳と微妙に吹っ飛んだサスケを視認した。

「……」

……。

世界が停止したかと思われた。

勿論、不気味に静まる教室内の時間を再起動させる事が出来たのは、

そんな空間を作り出した張本人だけだった。

「ふ、ふう。危ねえ危ねえ。とんだ惨劇になっちまうところだったぜ」
「い、いったい何があったんだ？」

態とらしくかいてもいない汗を拭った私と、異様な生徒達の様子に困惑したイルカの声が被る。

ナルトなど、普段敵視していた筈のサスケに憐れみの視線を送る始末。

流石に、可哀想な事をしたかもしれない。

第八訓（後書き）

設定変更 ←

チャクラ刀装備と性質変化設定については、削除しました。
我愛羅には、砂を操る能力があるし小技は必要ないですね。変わ
りに体術面を強化しようと思います。

第九訓

某月某日（雲）

時間の経過ごと無表情に拍車が掛る私。怯え出す7班。そんな雰囲気には耐えられる筈がないナルト。結果、ナルトの軽い悪戯に便乗した私は、悪意を込めた起爆札を贈ったのだが、流石に喰らわない。…チツ。

「その君、今の聞こえたよ。んー、なんて言うかな。おまえらの第1印象……、嫌いだった！」

「遅刻した貴様の印象も大概だけだな」

満面の笑みを浮かべた厭味に、遅刻した癖に謝罪さえしない上忍+7班が固まった。普段使わない筋肉を使った為か頬が引きつったかもしれない。何れにせよ、既にこの担当上忍に、忍者失格の評価をくだしていたが…。

□ ■
■ □

翌日。下忍最終試験。

昨日の気まずい空気を忘れたのかごとく、堂々と遅刻しやがった神経図太い力カシ。演習場に集合命令をした本人が遅刻したのだ。最早、元々最低だった力カシの評価が更に急降下した。

「ここに鈴が2つある。これを昼までにオレから奪い取る事が課題だ」

勿論、7班全員の軽蔑の籠った視線も飄々と流すダメ男力カシ。

この時、私はこの男の減給を必ずや火影に訴えようと心に誓った。

「手裏剣も使っていいぞ。オレを殺すつもりで来ないと取れないからな」

「でも、それじゃ先生が危ないわよ！」

しかも性悪。

尤もらしく仲間割れを誘おうとする辺り特に。

こんな男を心配出来るサクラを尊敬する。

ナルトは私とおなじく機嫌最悪。ナルトの場合単に気に食わないだけだと思われる。そして、ついにナルトがホルスターから苦無を抜き取った。

「……！」

その時、既に背後に周り込もうとする力カシに気づいたナルトが体を捻る。そのまま苦無の軌道を修正したナルト。

意外な反応速度に驚く力カシだが、ナルトが苦無を投げるより速く、ナルトの手首を掴んだ。

「惜しかったな。まだスタートは言っていない筈だけど……。ま、今のオレを殺るつもりで来る気になったようだな」

「ああ。だがちよいと俺を侮りすぎじゃねえか？ 注意力散漫だぜ。
カカシ上忍」

「…ッ！」

「え？」

サスケが目を見張る。サクラは呆ける。

私が隙について、真横からカカシの首筋に苦無をあてがったのだ。
此方を舐めるのは勝手だが、弄ばれるのは好きじゃない。

「そつか。おまえもいたんだっけね。ククク、確かに油断しすぎた
かもな。だがやつとおまえらを好きに成れそうだ」

「カカシ上忍。生徒に対するS臭い発言は控えた方がいいぜ。この
ペド野郎」

「おまえね。一々水差すのやめてくれる？ それと俺はペドじゃない
！」

「へいへい」

自分がSかについては否定しないらしい。

「てか、さっさと離せつてばよ！」

カカシが喚くナルトを漸く離れた。私も苦無を退く。
カカシ理論だと「仲間を見捨てる奴は屑」らしいし。（私が仲間と
認めているのはナルトのみ）これが実戦だったら、カカシ程の実力
者からナルトを救出出来た者は、私くらいのものだ。

「じゃ、始めよつか。よーい…スタート！！」

合図に合わせ、いっせいに散開する。約1名を除いて。

「忍たる者、基本は気配を消し、姿を隠すべし。…の筈なんだけど、我愛羅」

「なんだ」

「なんだじゃないでしょ。おまえ何してんの？」

「すぐ分かるさ」

「いざ、尋常に勝負！」

「…ああ、なる程ね」

忍らしからぬ発言者にカカシが納得した。馬鹿正直に現れたナルトに理解を示した。

私はナルトの襟首をひっ掴んだ。

「が、我愛羅！何すんだってばよッ！勝負の邪魔すんなあ！」

ぎゃんぎゃんと喚くナルトをまんまと茂みに引き摺り込んだ私は、ナルトをぶん殴った。

勿論手加減したが。

「黙れ」

「…ううぐ。殴ってから言うなってばよ…」

たしかにすまない事をした。…悪い頭が余計悪くなるかもしれない。

「馬鹿が。少しは頭を使え。貴様のその脳味噌は飾りか？さっきので分かれ。正直おまえ1人じゃ、あの上忍から鈴奪えるか難しい」

「んなのやってみねえと分かんねえだろッ！」

「最後まで聞け。常識的に考えろつての。普通1人じゃ無理。だったら1人じゃなきゃいいんだよ」

「でもさでもさ。鈴は2つしかないって…」

唸るナルト。

べつに、ナルトが協力しまいと私は1人でも奪える實力くらいあるが、先刻のナルトとカカシを見るに、カカシの動きは見えたようだが、体がついていけないようだった。相手との実力の差を考えれば、ナルトは組んだ方がいいと思うんだけど。

「ま、客観的に見た方が分かり易いか。ほれ。サスケが仕掛けるらしいぜ。見ておけ」

「サスケが!？」

サクラの悲鳴に気づかないナルトは、サスケとカカシに釘づけになる。

アカデミー
忍者学校出たてにしては、よくやった方だ。

カカシにイチャパラを読む暇を与えない攻撃。普通の下忍には出来ない火遁の術。そんなサスケの才能溢れる戦いは、原作同様の術に敗れた。

「ぶ。ぶ。サスケの奴…。ざまあねえってばよ」

ナルトが、地面に埋まったサスケを指差す。

カカシは満足げだ。大人気ない奴…。

警戒が緩んだ所に砂を操作した。

「何ッ!」

砂が鈴を捉える前にカカシに気づかれた。後退するカカシを追撃した私の蹴りが防がれる。

「砂瀑の我愛羅…。これがおまえの名の由縁か。変わった能力だ」

砂の能力を詳しく知られないために極力使用していない。これは原作乖離を防ぐ以前の問題だ。

たしかに、他里の私を受けいれてくれた3代目には感謝しているが、木ノ葉自体を味方と思っていない。早い話が、信用出来ないのだ。まあ砂を使わない分体術面が異常に上達したが。

兎に角、元々砂とて信用しない身としては、他里に簡単に能力を晒す訳にいかないのだ。

「さあな」

「くッ……やはりおまえは別格だな」

「そらどーも」

変わり身や分身といれ替わる隙は与えない。

払った足がもつれ、カカシがバランスを崩した。

その好機を見逃す筈が無く。ナルトの影分身がカカシを羽交い締めにした。

「ナ、ナルト！？」

「にしし。鈴貰い！」

「影分身かッ」

影分身がカカシを抑えつけ、本体のナルトが鈴を見事奪い取った。

実際は3人共全く本気じゃ無かったが、一応チームワークの勝利だ。

「はいカカシ君の負けー」

「負けはいいけど、カカシ君はやめて」

やった！やった！と無邪気に喜ぶナルトに毒気を抜かれた様子。ガツクリと肩を落としたカカシが溜息を吐く。

その後、丸太に縛りつけられるサスケとサクラの姿が見られたとか。

第九訓（後書き）

ガアラは、カカシの実力は認めています。ただ普段の生活態度のだらしなさに呆れています。嫌いな訳じゃない筈。

サスケは好きでも嫌いでもない。甘い覚悟が気にいらないだけ。

強いて挙げるなら目の保養的存在。この辺は元女だから。でも恋愛的な意味じゃありません。けど女の子にもそういう感情が芽生えるかは微妙です。

ヒナタは癒やし。ナルトは元気の源。

第十訓

某月某日（晴）

「なんだあ？超餓鬼ばつかじゃねえか。特に1番ちつこい、超阿呆面のおまえ。おまえそれホントに忍者か。おまえ」

初のCランク任務の護衛対象からの開口1番。
当然の流れだが、ナルトが激怒した。

「ツんの爺！殺す！」

「ナル君、殺すなら任務の後にしてくれ」

「いやいや。何煽るようなこと言っちゃってんの、おまえは。ナルト、おまえもやめなさい」

我関せずのサスケ、煩わしげなサクラ、傍観する私、騒ぐナルト。
見事にバラバラな子供達の前途多難な様子に、3代目とイルカが頭を抱える。

「なあ。ポンちゃん。アイツ等、俺の事覚えてんのかねえ」

「…サアナ。オレ二訊クンジャネエヨ。ツウカポンチャント呼ブナ」

「そつか…」

俺は任務の間際、確実に再会してしまう2人の事が脳裏に浮かび、複雑な気分になった。

■
□

再不斬と白。

あの2人は死ぬ。否。死ぬかもしれない。死ぬ可能性が高い。

あんな成金の豚のために死んでしまう。仮にも自分達を雇った者を見定めない彼等が自業自得なのかもしれないが。

ただ、あの2人の死に際をあんなモノにしたくない。或いは、白からしたら幸福な最期なのかもしれないけれど。

それに、言い訳がましくなるが2人は穢土転生する。なるべくは穏便に済ませたい。

「波の国に忍者はいない。他国との干渉を受け難い小さい島国に必要ないからね」

「じゃあ外国の忍者と接触する心配はないんだあ」

波の国への道中。

国の内情を訊いたサクラの感想。

仕方のない事かもしれないが、呑気なものだ。このあから様な殺気に気づかないらしい。今正に忍に尾行され、命すら狙われている真最中にも関わらず…。

だいたい、忍が争いや戦い、殺しを避ける事など出来やしない。厭なら忍など辞めてしまえばいい事だ。

「大丈夫だって。もし忍者が襲って来ても俺がサクちゃんを守って

やるよ！」

不自然な水溜まりを通過した矢先。サクラへ抱きついた私が、周囲に悟られぬようカカシと目線を合わせる。ナルトは不気味な程静かだ。まあ一応中忍程度の気配は探れるように鍛えたつもりだから当然か。襲われるのは時間の問題だ。

私といえば、こちらの意図を知る由のないサクラの拳を避ける。

「おっと。つれないねえサクちゃんは。ヒナちゃんなら可愛い反応してくれんのにさ」

「あんたね！その抱きつき癖やめなさいよ！（しかもサスケ君の前じゃない！しゃあんなろー！）」

心の声をだだ漏れにしたサクラの訴えに肩を竦めた。

「はいはい。静かにしなさいね。我愛羅もサクラをからかわない」

子供を宥める様は、上忍師じゃ無く、まるで幼稚園の先生のようにだ。現にカカシは苦笑ぎみ。

まあこういった空気は嫌いじゃない。

が、敵がこちらの事情の意を汲んでくれる筈が無く。先程の、不自然な水溜まりから飛び出した2人の忍が両脇からカカシを拘束した。

「――ッ！」「」

「1匹目」

ただしカカシは態と捕まったらしい。タズナ達が驚く中、紐を引くとカカシが無残に切り刻まれた。勿論変わり身。性悪な上に悪趣味な上忍だ。

サクラの悲鳴が痛い程耳に響く。忍が大声をだすものじゃない。

サクラが嫌いな訳じゃないけれど、忍を辞める事をお勧めしたい。
この程度のことでは悲鳴を上げているようなら、その隙に殺された
て文句はいえない。

「2匹目」

言動が生意気だとも思われたのか、雑魚兄弟が私の背に回り込
んだ。ナルトの方へ行くかと思いきや、私に襲い掛かる。そのナルト
は既にサクラとタズナを庇い、臨戦態勢だ。

常だったなら、面倒臭い事が嫌いな私が動く筈が無く、サスケと力
カシに任せたかもしれないが、わざわざ私を標的した事実が気にい
らない。

己の分を弁えない雑魚には制裁が必要らしい。

「忍法金縛りの術」

「「な……ッ!?!」」

これはアカデミー生でも簡単に使える術。幾らなんでも実力差くら
い分かった筈だ。

仕上げに回し蹴りで忍2人をドミノ式に蹴り飛ばした。

「雑魚が調子にのるんじゃないやねえよ。鬱陶しい。おい、さっちゃんと
力カシ上忍。とつととソイツら縛れよ」

「なんでオレが……」

「いいじゃねえか。見てただけなんだし」

サスケが不服げな表情を浮かべる。サスケの事は基本放置。

手間を省いてやったのだ。感謝されこそすれ恨まれる謂われはない。

「なんか、我愛羅に全部おいしいことれたってばよ」

「いやいや、ナルトも十分凄かったと思うよ」

現れたカカシがナルトの頭をポンポンと軽く撫でる。少なくとも普通の下忍が尾行や罫に気づかない。

カカシは十分ナルトは賞賛に値すると思ったのだ。本人は不満げだが。

「ソイツ等、オッサン狙いみてえだぜ。一瞬オッサンの方に気が逸れた。ま、誰に雇われたかなんざ吐くと思えねえし殺しとくか？」

「おまえね……」

「あ？」

複雑そうに顔を歪めるカカシを怪訝に見やる。

元暗部の癖に、何を今更私くらいの子供が殺す云々を口にした程度に反応したのか。カカシは13歳で暗部に入ったなら殺しくらい経験したんじゃないのか。自分の事は棚上げか。サクラやサスケ、ナルトまでが顔が強張った。

「何辛気臭い面してやがんだ。忍は元々殺しが専門だつつつの。出来ねえなら死ぬだけだし、忍なんぞ辞めちまえ」

「……なんだと？」

「待った、サスケ。こんなところで喧嘩はやめなさいよ。我愛羅のいう事も分かるけど一応尋問はしとかないといけないからね」

「……………」

ナルトは眉間に深く皺を寄せ、深刻な表情で黙り込んでいる。恐らく、自分の理想と忍の現実の違いに動揺して悩んでいると言ったところか。

「ちょっと！偉そうに言ってるけどそういうあんたは出来るの!？」

「ハア？」

終わった筈の話を蒸し返され、カカシがあちゃあと額を押さえる。

「貴様是他里の俺がなぜ木ノ葉にいるか分かるか？」

「留学って訊いたけど。それと今の話がなんの関係があるのよ」

纏っていた雰囲気を変えた私に気圧されたが、サクラは態と気丈に振る舞った。度胸だけはある。サクラのはただの恐いもの知らずとしかいわないが。

その辺はナルトとおなじだ。ナルトのサクラへの好意は直感的な同族意識かもしれない。

「…あるね。俺は幼い頃からある力を宿していてな。父はそんな俺を里の兵器として扱った。当然里の者は俺を恐れ、忌避した。そんな中、俺の精神は日々不安定になっていった。そして、ある日ついにその力が暴走しちまった。その時の俺にその力を制御する術なんざねえ。手に負えなくなった父はとうとう俺を殺す事に決めた。それから毎日のように刺客に命を狙われたよ。俺が木ノ葉にいるのは砂に居場所がないからだ。厄介払いだよ。…その俺が人を殺した事がないと思えるか？」

淡々と他人事のように語る私に、皆が内容に絶句し、啞然する。信じられないようだ。信じたくないと言い換えた方が正しいか。彼等が信じようが信じまいが、興味はないけれど。

所々尾獣について省いたために、私の力が凄いように聞こえるが、人柱力は大抵の者が里の扱いは悪い。説明に間違いはない筈。しかし、こうして客観的に話すと原作の我爱羅より、私の扱いが酷いようない気がする。今更気にしても遅いが。

ナルトはおなじ人柱力としか教えていないが、事情を察したのか瞳

が哀しげに揺らいた。

第十訓（後書き）

微妙に過去暴露。

もうちょい後にしようと思いましたが、話の流れに身を任せてみました。

番外編

▲月 日（■）

敵は複数。鉄壁のオートの盾を敗るのは至難。

結果、任務の帰還中をまんまと襲われた私に、肉眼で捉えられない毒針が体内を浸食し、体の自由を奪った。至極単純な事だ、誰でも考え至る事。外への攻撃が効かないのなら裡への攻撃を試みようとしてもおかしくはない。

「化け物も所詮ただの子供だったか。意外と呆気ないな」
「……」

倒れ伏す私を憐れみの籠もった瞳が見くだす。

それは、幾度と無く見た事のある不愉快な眼差しだった。

仮題「ガアラの憂鬱」

冷酷にしか見えない見知らぬ忍の浮かべた憐憫。常だったならすぐにでも殺した筈の人間の視線だった。だが慢心が油断となった私の負けだ。

この毒の耐性が出来つつある肉体が麻痺し、動かないのだ。どれ程

の毒だったのか想像に難くない。相手は暗部。多分オートの砂は、今の自由のきかない身体じゃ差程保たないだろう。死に恐怖をかんじないか問われでもすれば、勿論恐いと答えるが、特別生に執着がある訳じゃない。

皆死は平等。死ぬのが遅いか早いかの違い。私の場合少し早かったのかもしれないけれど。父に刺客を送られるようになった時に、覚悟は出来ていた。

出来れば、もっと穏やかな暮らしをして、家族に見守られる中で死を迎えたかったものだ。どちらにせよNARUTO世界じゃ無理な話だったか。

「やっと風影様にマトモな報告が出来るな」

私を見下したまま、面の下で男がほくそ笑んだのが分かった。その様子を冷めた思考が捉えたが腹だたしさはない。既に私の死は決定したのだ。怒るだけ無駄。最早疲れるだけの感情だ。

「ではサヨナラ。我愛羅様。いや…バケモノ」

——ザシュ。

確かに、皮肉げな男の言葉が私が聴いた最期の言葉となる筈だった。

「——ッ！——！」

だが肉を断った音がしたあと、男の耳障りな悲鳴が酷く不快に鼓膜を打った。

「チッ、るせえな。弱えんだよ。おい白、出て来ていいぞ」

何が起こったのか分からない。億劫に開いた目線の先に、大剣を担

ぐ男と私より少し上と思われる少女のような少年、そのまた先に私が不快に思った男が倒れている。絶命したようだ。

「……」

見覚えのある2人に暫し言葉を失った。ここは国境付近の森だ。忍が通ることはべつに驚く事じゃない。だが私が驚いた理由はそこじゃない。それが予想外すぎる人物だったからだ。

「殺してしまわれたんですね」

「ああ。久しぶりに血の匂いを嗅ぎたくなっただけ、クク」

男の快楽を得たような恍惚とした表情に悪寒がした。こんな目をした人間に何度となく遭った事があるけれど、今だに慣れない。狂気を纏った男が醒めやらぬ目でこちらを指差した。

「白。とつととソイツから話訊け」

「こんな子供だったんですね。気づきませんでした」

会話の内容から分かるけれど、べつに助けた訳じゃないようだ。勘違いしそうだが、快楽殺人や無差別な賊とも違う。

2人の緊張感のない会話が私の無駄に張り詰めた空気を緩和した。殺す気はないらしい。

少年の方が私に近づいてくる。

「あの、だいじょうぶですか？」

「なんとか。あんた達のおかげで」

「それはよかった。良ければ、お訊きたい事があります。僕は白。この人は再不斬さんです。君は？」

「…我愛羅だ」

「随分アツサリ答えてくださるんですね。偽名ではないようですが」
わざわざ自己紹介してくれた事により、半信半疑だったものが明確なものへ変わった。

霧隠れの鬼人とその連れ子の白。原作の主要人ではない2人だけけど、主人公のナルトを始めとする7班に多大な影響を与えたあの2人だ。まさかこんな場面に遭遇する事になると思わない。

「俺の方こそ訊きてえな。そっちのあんた、再不斬だったか。あんた、何故その男を殺した？」

「…べつに。深い理由はねえよ。久々に人の血の匂いが嗅ぎたくなつた。それだけだ」

たしかに。つい今し方の血に酔った再不斬の様子を見れば、本心のようにも思えるけれど。

もしかしたら「バケモノ」の単語に反応したのかもしれない。私と遭遇したのは偶然かもしれないが、あの言葉は白の心をも決る言葉だ。原作でも白を大事にしていた再不斬の心境だったなら考えられる。

「そこの彼の面は砂隠れのものですよね。君は抜け忍なんですか？」
「んな大層なもんじゃねえよ。俺は任務帰還中に襲われただけ。ま、いつもの事だ。気にするな。OK？」
「……」

白がジッと私を見つめ続ける。

否。私は的確に、簡潔に、答えた筈だ。とはいえ、無言の圧力をかける少年に居心地悪くなる。

「嘘じゃねえっての。つつかあんたらまじで父様に雇われた忍じゃ

ねえのか？」

「父様？」

「……」

「僕も手荒な事はしたくないんです。話してください」

「分かった、分かったよ。物騒なもんはしまえ。べつに隠したい事でもねえ。単に俺が触れ回りたいくらいだけだ。ま、なんだ。その、なんつつか。…俺、人柱力なんだわ」

白が息を呑んだ。

そして、興味のない様子だった再不斬が、初めて私を視界に納めた。

「あんたにも訊いた事くれえあんだろ。化け物を体にいれられた器、人間兵器つつうの。俺は生まれた時からソイツをいれられた。父様は俺を里の最強の兵器に育てようとした。けどな、そんなん上手くいく訳ねえ。俺にそんなモノを制御出来る訳ねえ。想像どおり、俺のナカの化け物は暴走しやがった。あとは破壊しかねえ。暴れまわったよ。その結果、父様は俺を処分する事にしたらしい」

そんな事が日常茶飯事のものとなったのだ。私の精神的負担がどれ程かお分かりいただけるか。

数秒か、数分か、果ては数時間か、痛い程の沈黙が過ぎたように思えた。

「一緒に、来ますか？」

「は…？」

「おい、白」

「駄目でしょうか」

「…チツ、勝手にしろ」

何がなんだか分からずポカンと阿呆面を晒す。

「僕の大切な両親は、この血のせいで死にました。血継限界だった母を父が殺したんです。僕も殺されそうになりました。気がついたら僕は父を殺していました。……自分が、この世に必要な存在だと分かりました」

「そうか」

「ええ。……ねえ僕達と一緒に来ませんか？」

同情の類じゃない。白は本気だ。

正直、私には魅力的な誘いだった。だが私は伸ばしかけた手を退いた。

「俺には、上に姉と兄がいる。いつも弟の俺に怯えるし、顔色を伺ってくる。鬱陶しい奴らだ。それでも、最近は少しだが普通に話してくれるようになった。父様は父親としては最低な人だが、迷いを捨てきれない人でもある。あの人が自ら俺に手をくだそうとしたことはない」

以前から気にはなっていたのだ。風影にまで至った父自身が、弱い訳がないのに、1度として自分が私を殺しに来た事はない。これだけ何度も失敗しているのだ。直々に殺しに来たとしても不思議はない。

テマリとカンクロウは恐がってはいるが、私を弟として見るし近く事をやめようとはしない。

「…そうですか。残念です」

私の言いたい事が分かったようだ。白はそれ以上追求してこようとはしない。

潔く背を向けた。

「行くぞ」

「はい」

私は去っていく彼等の背に微笑みかけた。

「なんだよ。十分必要とされてんじゃねえか」

番外編（後書き）

当初より書きたかった場面なんだけど、文章にするとなかなか上手くいきませんね。

昔お誘いを受けました的な事を書ければよかったんですけど。いらん事まで書いたような気がします。

今度砂の3姉弟の話も書きたいです。

第十一訓（前書き）

久々に気違いぶりを発揮。ガアラは基本気違い。メンド臭がり。我が儘。気分屋。そんな子…。

第十一訓

某月某日（晴）

「よお、我愛羅。あの時の餓鬼がデカくなったじゃねえか」

男がニイと不気味な笑みを浮かべた。

再会を喜ぶ気分になれないし、元々そんな気易い間柄じゃない。私は正直に内心を吐露するように眉を寄せた。

「オレ達の間につもる話もないがな。砂隠れの忍が、なんで木ノ葉の連中といやがる」

「ああ、実は…」

私は真顔で返答した。

「このサスケ君と愛の逃避行中なんだ。俺らはたまたま居合わせただけで、関係ないんで。じゃ」

「大真面目な顔して、何嘘吐いてんだッ！しかも何気に俺を巻き込んでんじゃねえ！」

「チッ…」

目敏い野郎だ。

この手の発言に慣れたサスケの叫びに、一瞬だが場の緊迫感が薄れる。

カカシだけは遠くに目を彷徨わせ、現実逃避に走った。この際、ナルトが腹を抱え、震え出した事は気づかないフリに徹しよう。その他の慣れていないサクラやタズナは啞然し、呆氣にとられる珍しい再不斬が見られた。

「『…真性の阿呆ダナ』」

守鶴の声が聞こえたような気がしたが、多分気のせいだ。

□ ■
■ □

漸く波の国へ到着した私達7班。

依頼人の言葉を信じるのなら、要は橋が出来ると波の国の交通機関を独占したガトーが困るため、タズナが邪魔になったのだ。ついに命を狙われたのがいい証拠。

動くのが遅過ぎたタズナ達の自業自得としか思えない。ガトーに目をつけられた事だけ見るなら気の毒だが。所詮、それだけだ。不正を働いたタズナを護衛してやる義理が私達にはない。

しかし決めるのは上司たる力カシだ。その命令を聞く部下が私達。結果は原作を読んでくれれば分かる。結局送り帰す事だけはするらしい。本来は即帰還する筈だったが、仕方無く納得した。

だが懐かしの再会を果たした私に、痺れを切らした再不斬が力カシを挑発した事により、戦闘が始まった後がいけない。

その戦闘が原作と殆どおなじなもの、水牢に閉じ込められた力カシが私に助けを求めた事もべつに構わない。ただ、思わぬ事に、私の眼前を塞ぐ少年が現れたのがいけなかったのだ。

「君を行かせる訳にはいきません」

「貴様…。白か」

予想していて然るべきだった。恐らく、白が行動に移した原因は私にある筈だ。もしも原作同様のナルト達だけだったなら、白が参戦する事は無かっただろう。

何せ、私は通り名がつく程に1部に有名だ。術の維持のために動けない再不斬の事を考えれば、不確定な実力の私は邪魔にしかならない。

単なる下忍と思われているナルト達は始めから眼中にないようだ。まさか写輪眼と人柱力が2人ずつ集まった集団とは誰も思わない。

「お久しぶりですね、我愛羅君。こんな形で再会する事になるとは思いませんでした」

悟られぬ気配のまま現れた仮面をつけた謎の少年にカカシすら驚く。

「仲間がいたのか！」

普通そのくらい予測しておくのが常識だが、今のカカシは思った以上に焦っている。長く前線を離れていたのも原因かもしれない。そんな風に苦々しく呟くカカシを再不斬が嘲った。

ナルトは兎も角、再不斬も私が人柱力だと知っているのだ。易々とカカシの下にいかせる気はないらしい。

「ナル君、カカシ上忍の事はおまえらに任せんぜ」

「我愛羅ッ！おまえ何考えてんだ！」

「おう！任せとけてばよ！」

「フン、当然だ」

「ダメだ！元々オレ達の任務はタズナさんの護衛だ！タズナさんを連れて逃げるんだ！！」

覚悟を決めるナルトとサスケ。

カカシが何やら叫んでいるが、ナルトと私だけならまだしも、サク
ラやタズナが逃げられる訳がない。

相手は元霧隠れの鬼人と血継限界の白なのだ。タズナを庇っている
余裕はない。

「カカシ上忍、冷静にこの状況を見てみる。今ソイツから逃げられ
たとしてもまた捕まるのがオチだぜ」

「……ッ」

「クク、分かってんじゃねえか」

事実、ナルトは原作より強いとはいえ、再不斬を単独で倒すには力
不足の上に経験不足。白が相手だったなら九尾のチャクラを使えば、
まだなんとかあったかもしれないが、此処は原作同様にサスケと協
力した方がいい。再不斬が此方を侮っている今なら勝機があるかも
しれない。

どちらにせよ戦い以外の選択肢は存在しない。幾らタズナでもそれ
くらい理解出来る筈だ。

「そんじゃ、白。俺達は俺達で戦闘開始といこうじゃねえか」

「……」

白の返答は瞬身の術。

速さはなかなかのものだ。今のサスケには追いつけないスピード。
動こうとしない私の喉が狙われる。人間の1番無防備な箇所を的確
に狙われたおかげか、白の千本を容易くクナイで受け止める事が出
来た。

「――」

千本を弾いた私が反撃に出る。次々に千本を弾いていく。そのうち息も吐かせぬ攻撃に白の顔が歪んだ。

クナイを受け切るのが精いっぱい。白に片手印を結ぶ暇などない。否、そんな暇を私が与えない。

「ッ」

「なんだよ。随分と辛そうじゃねえか」

「思ったとおり、やりますね！」

「そりゃ光栄だな」

「ガッ……！」

肉薄した私が、白の胸を打つ。

吐血した白に手応えをかんじた。

「おまえの本気はそんなもんかよ。だとしたらガツカリだぜ、白」

「僕、はこんなものではッッ」

「だったら本気を見せてみるよ。風遁大突破」

胸の衝撃に喘ぐ白を容赦無く吹き飛ばす。遠くに飛ばしすぎないよう威力は抑えた。

距離を開いた白が印を結んだ。

「氷遁ツバメ吹雪」

「火遁豪火球の術」

空を舞ったツバメの姿形をした氷が針へと変わった。

私を襲いくる針を火球が溶かす。火遁は出来ない事はないけれど、

苦手な部類だ。幸いな事に、この術自体が火遁に弱かったらしく、簡単に燃え滓に変わった。

「くッ…！使いたくはありませんでしたが、仕方ありませんね…！
氷遁秘術魔境氷晶！」

追いつめられた末に血継限界たる術を叫ぶ。

私と白の周囲を氷の鏡が囲んだ。事前に知っていた私は動じない。
寧ろこの機を伺っていた節すらあった。

「『オイ我愛羅、テメエコノママ砂ヲ使ワネエ気力ア？』」

「いやいや、こっからだよ…」

砂の我愛羅が砂を使わないのは、たしかにおかしいかもしれないが、能力を使わずとも負けないぐらいの自負がある。何より、出来れば中忍試験（木ノ葉崩し）までは、この能力の詳細は知られたくない。それは、勿論力カシや7班の子供達とておなじ事だ。

が、状況が変わった。否、この状況へと私が誘導したと言った方が正しいか。

私の思惑に気づかない白が、いつのまにか入り込んだ鏡の中から千本を投擲した。だが千本は私に到達する事無く音をたて、地面に落下した。

面の下表情は見えないが鏡面世界の白が驚愕したのが分かる。

「この中ならアイツらに見られる心配もねえ」

そう、私は「砂瀑の我愛羅」。砂の盾が私の無傷を保証してくれた。

第十一訓（後書き）

戦闘描写があいかわらずへボい。

毎回の事ながら亀更新なのが申し訳ない。こんな駄作を待っていてくれる方々、ホントにすいません。

番外編

月▼日(■)

少年の目線に少女の小柄な体に不似合いの刀と青い短髪が映った。
少女の方も少年に気づいたのか活発な笑顔を浮かべ、駆けやる。

「があら君！」

その邪気のない少女が砂の最終兵器たる少年に手を振った。
忌み嫌われる少年へ自ら近づく事は、自らも嫌われる事を意味する。
だが少女自身が、周囲に何と言われようが意に介す様子は無かった。
普段表情の希薄な少年すら呆れ顔にする程。

「また来たのか」

「あら。君、喋れたのね」

少女の事を考え、少年は話掛けられようと無視しつつけたが、ついに根負けしてしまったらしい。初めて、少女へと返事らしい言葉を返してみれば、随分な言い様だ。

少年はいつもの無表情だったけれど、内心毒づいた。

「おまえは俺をなんだと思ってやがる。俺と関わったとこでいい事なんざねえぞ。むしろ災いの素だ」

「…雫」

「あア？」

「わたしのなまえよ。今度から雫と呼んで」

少女は人の話を聞かない人種だと、少年はこの時知った。だがズレ

た返答ばかり返す少女に興味を示したのも事実だった。

仮題「おとめ心」

砂漠地帯は「砂瀑の我愛羅」の領域。数十人の刺客を送られたくらいで揺るぐ筈のない絶対のフィールド。その日も「砂」の支配者たる我愛羅が当然の如く生き残った。

しかし、その日常と化した血塗れた場所に、正しく場違いな少女がいた。そう、唇を戦慄かせ、尻餅をついた少女、それがあの雫だった。

雫が何故あんな真夜中にあの場にいたのかの理由は誰も知らないまま。我愛羅自身にも1ミクロンの興味もない。偶然あの血生臭い場に遭遇した不運な少女、くらいの認識だ。

ただ、その日を境に雫が我愛羅に興味を持ち始めたようだった。

「ねえねえ。があら君はスキな子とかいないの？」

今では日課の如く会えば話をする始末。

「おまえ、俺を幾つだと思ってんだ。8つだぞ、8才なんだぞ。いる訳ねえつつつの」

雫の唐突さは今に始まった事じゃないが。今回はやけに飛躍した質

問だ。

そもそも元女だった少年が女の子に好意をよせられるか分らない。だからとはいえ、男に好意をよせる事は本能が嫌悪をかんじる。つまり、我愛羅自身がそういった事に興味が沸かないのだ。

「君らしい考えね。じゃあわたしが立候補しちゃおっかな」

「だが断る」

「即答!？」

「突然何を言い出すんだ貴様は」

「あら、突然じゃないわよ。があら君が全然わたしに興味を持ってくれないからじゃない」

終いには顔を赤くし、拗ねる雫。

ここまで言われ、気づかない程、我愛羅は天然や鈍感な訳じゃないが、べつに雫の気持ちに気づいたとて、何かが変わる訳じゃない事は明白だった。

「だいたいおまえもまだ10歳くれえだろ。無駄に発育いいとマセるもんなのかねえ」

我愛羅が雫の胸やら尻やらの部位をしげしげと観察する。

無遠慮な我愛羅の視線に雫が震える。

「何処見てんのよ馬鹿があらッ!」

「いや、言いがかりはよせ。俺の好みは癒し系だ。少なくとも天然女はねえから安心してくれ」

「それ私の事!？」

毎度の事だが雫に呆れた我愛羅が溜息を吐く。

「おまえも俺なんかやめとけって。それともアレか、おまえは年下趣味だったけか？」

「そんな訳ないでしょ！そんなんじゃない。君、なんだか大人びてるんだもの。時々ホントにわたしより年上みたいに見えるわよ」

「おいおい、おまえに言われたくねえよ。おまえこそとてもじゃねえけどただの小娘には見えねえぞ」

「ふふ。そうかな。…でもそっか。全くの脈無しな訳ね。じゃあしようないわね」

失恋したにも関わらず沈んだ様子も無く。

それは突然おこった。雫が普段と変わらぬ調子のまま抜刀したのだ。勿論その過程で斬り掛かってきた。

元々強引なところはあったけれど、強行手段に出られた事はない。そのせいか、驚きはひと潮だった。

「な、んのつもりだ、貴様…」

「やっぱり不意打ちでもダメかぁ。…ごめんね、があら君。でもわたしは君に死んでほしいの」

砂のオートがある以上避ける必要はないが、咄嗟に飛び退いた。

その姿と言葉が夜叉丸とだぶった故に無表情の我愛羅の顔が強張った。

「雫、貴様…！」

「これがわたしが君に近づいた理由」

「……恨みか」

「そうよ。君は3年前の事を覚えてる？」

雫の青い瞳に暗い光を宿した。

3年前といえ、心の不安定だった我愛羅が暴走したせいで、多く

の里の者がその命を散らした年。侍だった雫の父として例外では無かった。

「あの時、あの場にはわたしの父と母もいた。君が殺したのよ」

「復讐、か…」

「ええ。その通りよ。君に近づいたのもそのため。ホントの事いうと迷っていたのよ。だけど、あの時、君が平気で人を殺しているのを見て、決心がついた」

「あの時？……そうか。あの夜の事か。だが何故今なんだ？」

「君は女や子供に絆されるような人じゃないみたいだから。不意打ちを狙ったの。でも失敗しちゃった」

失敗する事は予め予想出来たことだ。確率は低いが、雫も何1つ勝算無く挑んだ訳じゃない。

復讐を果たす覚悟がある。既に後戻りは出来ない。簡単に死ぬ訳にはいかないのだ。

雫は刀を構える。

「無駄だぜ。俺の盾の前じゃ刀なんざ無意味だ」

「うん。それも分かってるわ」

それも普通の刀だったらの話。

雫が再び我愛羅に斬り掛かった。無論、砂の盾に防がれる事を承知の上。

だが雫はそれ程に愚かじゃない。彼女が無意味な攻撃などする筈が無かったのだ。この時、我愛羅は完全に雫を見誤ってしまった。

「ツツ、何!？」

「があら君、忘れちゃったの？わたしだって、忍なのよ」

「ハッ、んなこと知ってるっての。だがその歳で性質変化が出来る

下忍がどこにいんだよ」

我愛羅は予想外の事に反応出来ず、愚痴とともれる悪態を吐く。そう。よく観察すれば分かる事だが、雫の刀は侍があつかうような通常の刀じゃない。本来は刀にチャクラを流し、使用する刀。そのチャクラ刀に雷を纏っている。理由は訊かずとも簡単な事。土遁が雷遁の術に弱いように、砂の弱点もまた雷。雫の狙いが、正にそれだったのだ。

案の定、我愛羅の砂の盾は斬り裂かれ、そのまま肩から胴を斬られた。とはいえ、幸い傷は浅く、動くのに支障はない。

「ふふ。此処にいるじゃない。まだ不安定だけれど。わたしじゃこれが精いっぱいだったみたい。君に傷をつけられただけ凄い事よ」
「全く…。俺も買収されたもんだ、な」

雫と距離をとるべく蹴ったキレのない攻撃は難無く避けられた。砂の鎧を纏っていた訳じゃないため、傷口から血がドクドクと溢れ出る。常に砂に護られ、いくら傷が浅くとも珍しく怪我を負った我愛羅にとつたら、痛みを敏感にかんじられた。

「休ませる暇なんか与えない！」

息を吐いた我愛羅へ雫が駆ける。

今度は自分の意思で砂の盾を展開しない。通用しない盾に意味はない。

「お遊びは終わりだ」

手を翳した我愛羅の冷たい低い声が宣言する。

「…………え……あ、…………ゴホツ…」

雫が血を吐いた。

気がついた時には遅かった。雫の胸部を小さな球体の砂が貫いていた。

見上げると、硝子玉のような翡翠の瞳が地べたを這った雫の悔しげな瞳とぶつかる。

その少年は紛れもなく修羅だった。

「…ゴホツ、ゲホツ、ふ、はは、ははは。わたし馬鹿だなあ。こんなあつさり…」

最早逃れられない。

雫は自分が甘かった事を悟った。すぐに訪れる死を理解したのだ。

「ねえ、が…ア君、わたし…、ね……ホントは、君の事…」
「——」

だから最期に伝えたかったのかもしれない。

憎かったけれど、憎み切れない少年に…。

だが少女が最後までつづく言葉を伝え終える事は叶わず、息絶えた。

最期を見届けた少年は少女の成れの果てから背を向ける。

「よし、帰るか」

砂の化身を宿した少年は何事も無かったかのように呟いた。
そして、少年は平穏とかけ離れた日常に帰る。

番外編（後書き）

これもガアラの日常の1つ。黒歴史。所謂トラウマ話。この話を見れば分かると思いますが、ガアラは壊れてます。

多少おかしくなれないと現代人が生きていくのは難しいと思いますし。

恋愛のレの字もない本編に焦れた結果に書いた意味不明な内容。なんかホントに申し訳ない。

後半書いてて、「何が書きたいんだろ」と思いつつ、ここまで書いたし最後まで書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4021p/>

転生日記

2011年7月3日21時32分発行